幼児の教育　昭和62年1月1日発行(毎月1回1日発行)昭和23年4月15日第三種郵便物認可　第86巻　第1号

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1987 1

昭和 61.12.11 受入 附属図書

お茶の水女子大学図書
昭和63
199160

第86巻　第1号　日本幼稚園協会

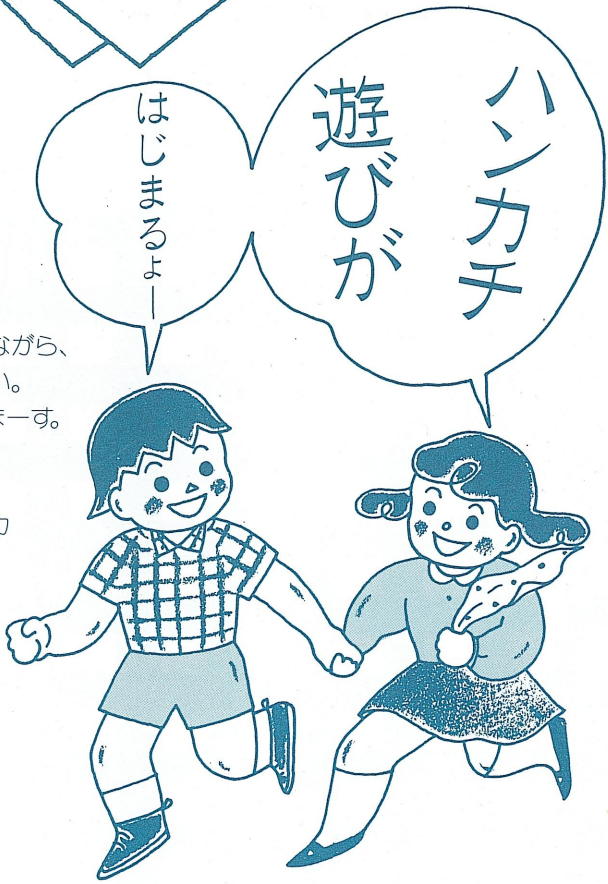
新刊！

新しいアイデア

ハンカチ遊び

タキガワ タカシ
滝 川 恭 子　著

A5判　178頁
定価1300円



先生は魔法使いでーす。
ハンカチをひらひらさせながら、
たのしく演技してください。
小さなハンカチが変身しまーす。
子どもたちはただただ
びっくり。
マジックの小道具、ハンカ
チのたのしい遊びを
73種類も紹介
　　します。

●内容●
エプロン、ぼうし、でんわ、トースター、アイロン、サイフ、ネクタイ、カメラ、おはな、ちょうちょ
かたつむり、ねずみ、ペンギン、ぶた、アイスクリーム、バナナ、にぎりずしなど73種類も紹介。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783㈹にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第八十六巻　　第一号

幼児の教育　目次

――第八十六巻　第一号――

創造性……滝口　俊子…（4）

子供の世界を共に生きること……津守　真…（8）

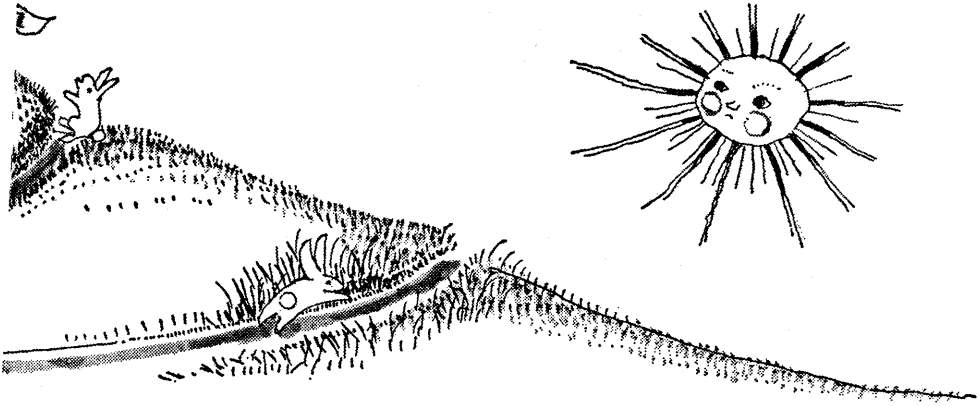
SF的読み解き　子どもという風景

第二十一回　砂の幻想……堀内　守…（12）

自然とのふれあい（その2）……斉藤　芳子…（22）

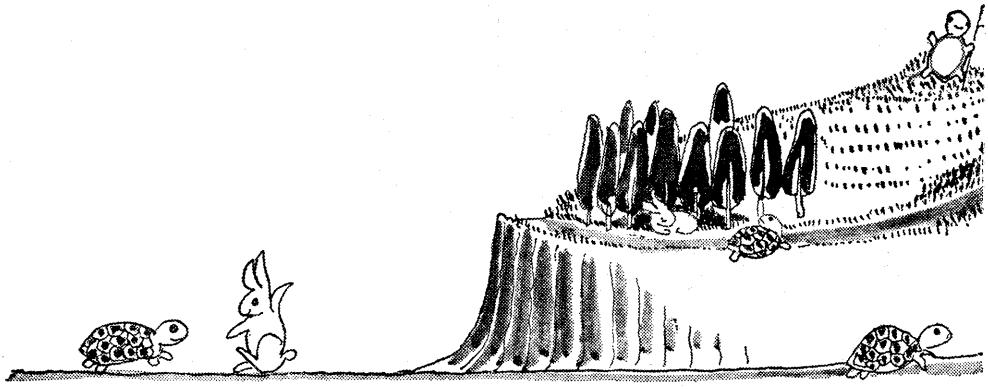
© 1987

日本幼稚園協会



飛び立とうとする子らと……牛山佐智恵…(27)
子どもの遊び（その8）……E・A・A・フェルメール　浜口順子訳…(32)
兎園随筆㉖
出会い（その2）――光る沙漠――……蕪木　寿江…(42)
倉橋惣三の演劇教育論（2）……冨田　博之…(48)
若いお母さんたちへ……はるにれの会　菊池　慶子…(56)

カット・福田　理恵
編集部・小澤　誉子
土屋真美子



創造性

滝口俊子

子ども達との親離れ・子離れのプロセスが始まっているせいか、子ども達の幼い日々の事があれこれ思い出されることの多いこの頃。子どもも同じような思いなのか、次女が最近、英作文の時間に書いたという「忘れられない経験」という文を見せてくれました。それは毎年夏休みに行なっていた我家の『子どもの日』の思い出でした。

次女が幼稚園の頃、すでに私は大学の仕事など毎日の勤務に出ていましたので、夏休みだけは何とか子どもとの生活を第一にしたいと、完全に休みを取るようにしていました。お休みの取りにくい小児科医の姉の二人の子どもも預かって、年子のように年の近い五人の子どもとの生活。それは賑やかでした。

今、思い出すと「楽しかった」としみじみ思いますが、夏の暑い盛り、子どものかん高

い声の中で、掃除・洗濯・食事の世話と追いまくられて過ごすことは、気の休まる暇がなく、大人の職場にいる主人や姉たちが恨めしくも感じたものでした。

そんな私の気持ちを察してかどうか、ある日、子ども達から「ごはんも全部自分達でする『子どもの日』を作って」という申し出がありました。勿論、私は大賛成！　一番下の息子はまだ二歳。最年長の姪もまだ小学校二年生でしたので、そんな事を子ども達が考えついたという事に、とても感激しました。私の賛成に喜んだ子ども達は、早速頭を集めて相談を始めました。

やがて、子ども達はやって来て「あしたの朝はドアをたたくまで起きて来ないで」と言います。私は約束しました。子ども達は顔を見合わせて嬉しそうでした。

そして翌朝。早くから子ども達のひそひそ声や、台所でカタカタと何かしている音が聞こえてきます。

やがてトントンとノック。ドアをあけると、五人の子ども達は一斉に「おはようございます！」そして深々と最敬礼。「お客さま、朝食の支度が出来ています！」

居間のおぜんの上には、ごはんと味噌汁と焼き海苔とゆで卵と、そして干物まで並んでいます。

さらに私がびっくりしたのは、その狭い居間に「おおひろま」と書かれた紙が張られていました。隣の部屋は「つばきの間」、台所には「かんけいしゃいがいたちいりきんし」、廊下の張り紙には「だいよくじょうはこちら」と矢印が付いていました。

その一日、私は子ども達の大旅館のお客様として過ごしました。私がとても楽しかったので、子ども達も生き生きと嬉しそうでした。

全く子ども達の自由に任せる『子どもの日』はその後も我家の夏休みの年中行事になりました。ある年は、大型冷蔵庫の空箱をお店から貰ってきて、ベランダで家作り。ある年は、お握り作りから子ども達だけでして、ハイキングへ。目的地に着いてお弁当を開いた時には、お握りの形をしていなかったという話は、もう何年もたっている今も、子ども達は思い出しては笑います。

幼い日々の子ども達は、なんと創造的に遊ぶものかと感心してしまいます。

やがて子ども達も大きくなり、遊び方も変わってきました。そして、私は静かな自分の時間を持つ幸せを手に入れる事が出来たのですが、それと引き換えに無くなってしまった子ども達の活気は、今になるとたいそう恋しく感じられてなりません。

一時たりともじっとしてはいられない程、心も体もぴょんぴょんとしている幼い日々の子どもの姿を、ある本を読んだ時にも、とても懐かしくいとおしく思い出しました。

それは、広中平祐先生の「創造力をはぐくむ」という小さな本でした。

先生は、創造性が伸びる三つのタイプとして、次のような事を言っておられます。大学の教育の過程において大学の教育を受け入れる〝学びの時代〟から、自分独自の創造性によって〝研究する時代〟への転換の時期があって、その転換点をうまく通過していく学生の共通の特徴として、

まず「何を見ても〝これはすごい〟とか〝これは面白い〟と驚く人」
第二に「何を見ても〝それは何故だろう〟と不思議がる気持ちを持つ人」
第三に「〝これは素晴しい〟と感心する人」

先生の挙げていらっしゃる、この三つの特徴を持っていない大学生は沢山います。でも、この特徴を持っていない幼児は、本当に少ないのではないかと思うのです。

誰もが持って生まれたこれらの本性を、家庭とか集団保育における大人の側の余計な手の掛けすぎによってだめにしている要素がかなりあるのではないでしょうか。

だから子どもは放っておいた方が良い、とは決して思っていないのは勿論です。

文化を伝達する事の大切さを踏まえた上で、もっともっと子どもの持っている力を信じて良いのではないかと最近しみじみと考えるようになりました。

幼稚園の子ども達を観察している折りや、臨床の場で出会う子ども達の言動を見守っている時、子どもの姿をとても「面白く」「不思議に」感じ「素晴しい」と思います。子どもという存在は、私たち大人に、忘れてしまっている「創造性」を引き戻してくれる存在でもあるようです。

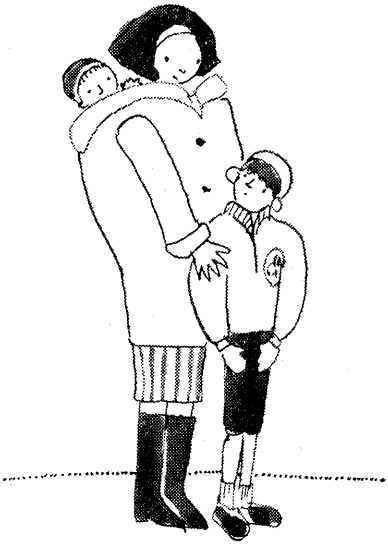
（立教女学院短期大学）

引用図書

「二十一世紀への教育論　創造力をはぐくむ」広中平祐　横浜パースデザインアカデミー

子どもの世界を共に生きること

津守　真



子どもの考え方や見方は、どのようにして理解することができるのだろうか。

子どもの考えは刻々に変化してゆくから、私共が知ることができるのは、いま眼前の子どもが何をしているかということだけであって、それ以上に、子どもの行為を予測することはできないという考えがある。いつもこの子はこういう風にするから、今度も同じようにするだろ

うと期待すると、その期待はしばしば裏切られるし、先入観をもつことが、現在をそのままに見ることを妨げるから、いま眼前で子どもがしていることだけしか、私は知ることができないという考え方は、一応、もっともである。それに対して、ある子どもの行為を継続して見ると、その子どもの行為の仕方の特色に気付かされるから、それぞれの子どもに独自の個性的な考え方を見出して、それに応じて子どもに接することが必要だと考えることもできる。この二つの考え方はどのように関連するのだろうか。

ある日、K夫は、私のわきを通り過ぎて、実習生と一緒に、職員室に通じるドアのノブに手をかけた。その実習生は、ドアをあけて、K夫と一緒に廊下の方に出ていった。

この場面で、私は、K夫がドアのノブに手をかけたことをたしかに知ることができる。これだけでは、単に外的行動の観察にとどまるのだが、更に加えて、私は、K夫はドアの向う側にゆきたいと思っていることが分る。外的行動と内的世界とはあわせてひとつの行為である。だが、私はそこまでしか言う資格はないのだろうか。

これまで、私はK夫とのつきあいも多く、ドアから廊下に出て、階段をのぼり、二階の廊下を通り抜け、反対側のドアから庭に出て学校をひとまわりすることを何度もくり返したことがある。このような体験から、K夫にとって、薄暗い廊下を抜けてもとの場所にもどることは、学校の生活に習熟するのに精神的な支えになっているのだろうと考えてきた。それだから、いま、ドアのノブに手をかけて廊下に出ようとするK夫の行為に、とくべつな意味を見ることができる。この場合、その体験を思い起すことは、この行為の理解を助けている。もしも、同じ行為を予測して、K夫が他のことをしようとするのに、同じルートで学校をまわることへと導いたとしたら、ゆきすぎになるだろう。

この日、保育のあと、話しあいのときに、その実習生は、K夫の一日の生活を追って、詳しく話してくれた。ドアをあけて廊下に出た後、階段から二階へと通り抜けるのを何度もくり返したこと、実習生の腕の中にくるまるようにして抱かれたこと、モップをふりまわして追いかけてよろこんだことなど、めずらしく、その実習生と一日中一緒に過した話は次々とつづいた。保育のあとの話は、行動の羅列と思えるほどに、具体的なことがつづくのだが、私は、こうして語られる一連の行為に子どもの世界があるのだと思う。その中のひとつの行為だけにとどまるのでなく、一日を通してつづいてゆくその行為の全体が子どもの世界だといってよいと思う。

少しだけ説明を補足する。最初、K夫は私のわきを通りすぎて、実習生と一緒にドアの方に向った。いつもだったら、私に声をかけたり、私の手をひくことも多いのである。そして、私が思ったように、階段から二階へと通り抜けた。このことは、かなり以前に何度もやっていたが、最近はほとんどしていなかった。また、腕の中にくるまるように抱かれたり、モップで追いかけたりすることも、ずっと以前によくやっていた行為である。この頃は、一日の中である時間をしっかりと相手をすると、自分で遊びをみつけることが多くなっている。つまり、この日のようなことは珍らしいのである。また、K夫は、私に対するのと、女の実習生に対するのと振舞い方をかえている。このことは、他の人に対しても同様であって、K夫は相手に対して気をつかい、相手に合わせて行為する。女の先生と一緒にトランポリンにのっていて、ああ疲れたという一言で、さっとおりたりもする。

この日に、女の実習生をつかまえて、ふだんより幼い仕方で一日を過したのには、それなりの意味があったのだと思う。それは、普段の日々が、この子どもにとって不適だということではない。積極的で活潑な日がつづいた後に、もっと幼かった日にもどるような日が挿入されるところに、成長の寂しさを感じさせられる。

K夫は相手に気を使い、人によって応対の仕方をかえる。気を使うというのは、相手がどういう状態にあるかを認識し、それを肯定し、尊重して自分の行動をきめることである。相手を傷つけまいとして自分を抑制することである。気を使いすぎると、自分を十分に出せなくなる。これは愛の問題であるが、ある限界をこすと、自分自身の真実を表現しないことにもなる。

この実習生が語ってくれたこの日のK夫の一連の行為に、この子どもの世界はあらわれている。つまり、保育者は、子どもの一連の行為を共に過すことにより、子どもの世界を共に生きている。後に話をするときに、おとなの意識にのこるのは、行為の結果として記憶にとどまり易い部分である。K夫がドアのノブに手をかけるところは、意識にとどまりやすい部分であるが、その以前に、私の傍を通りすぎて歩いてゆくところで、すでに、より幼い時期の行動様式にもどろうとする心が動いているのであろう。その部分は、後の話し合いのときには省略されてしまう。だが、保育の実践の最中に重要なのは、その部分を子どもと共に過すことだろう。そのときに、未来の展開はまだわかっていない。この実習生は、この一日を過すのに、未来は未知なままに、子どもの世界を共に生きることによって、ここに叙述したような行為が、結果として生れたのである。

こう考えると、保育の実践は、まだ形にならない子どもの世界を共に生きることだといってよいだろう。

あとになってふりかえるとき、そのある部分が意味を与えられて、おとなの意識の中に位置づけられる。

（愛育養護学校）

ＳＦ的読み解き
子どもという風景

第二十一回　砂の幻想

堀内　守

身のおぼえ

幼稚園や保育園には砂場がある。庭の片すみにあるのがふつうだ。

もちろん、小学校の校庭にもあるが、こちらの方は走

り幅とび専用のような使われ方をしている。これとくらべると、園内の砂場はまことにジェネラルな使われ方をしている。

「ジェネラルな」などというよりも、端的に「あそび」と表現した方が当たっている。

あの砂がどんな感触のものかは、砂をつかんだこと、砂をすくったこと、砂を手から手へこぼすことなどを通じて記憶に残っていく。

たぶん、数えきれぬほどのくり返しを通して。

それは平凡な反復ではなく、感触が洗練されていく過程である。

夏の日光を浴びて、砂が熱気をもち、文字通り砂は砂のごとく、さらさらになっているときの砂の感触は、雨あがりの、水を含んだ砂とは大いに異なる。水の多い、少ないに応じ、砂の様態は変わる。トンネルを掘ってもくずれないていどの水分が含まれていることもある。水分が多すぎて、山盛りにすることも不可能な場合もある。

手ばかりではない。足も砂の感触を保持する。腕も、お尻も。

手という器管が何かをつくるための大事な器管であることをあらためて知ることができるのも、砂場の妙なるはたらきである。同時に、手が重要な感覚器管であることも、砂場を通して如実に示される。ことに、この後者の面は、身体と精神という重要なテーマの開幕にも通じている。

砂の造型

砂場の面白さは、砂の形が自在なところから生じている。粘土とは違う。もちろん泥んこ遊びとも違う。形の保存が長くない。

砂場では何をつくるのかをあらかじめ考えておいて遊ぶというようなことは少ないようである。砂と戯れているうちにイメージが湧き、何かの形を思いつく。あるいはまわりの誰かのマネ、そして共同作業が始まったりする。

これも大事なことだが、夢中になって遊んでいる場面から日常に戻る。すると、まず立ちあがることになるが、夢中になっていた時の砂場と、立ちあがってあらためて眺めたときの砂場とは違って見えてくる。さっきまで想像を刺激し、別世界に惹きこんでくれた砂の様子は、単なる砂場に戻ってしまう。また、身体論も日常に戻ってしまう。衣服が汚れてしまうからである。

砂場から出て、ふりかえってみれば、形のくずれた残骸があるばかり。せっかくつくったトンネルも城も、その他もろもろの意匠もデザインも、すっかり消え、夢の跡ばかりが見えている。

立ちどまって、もういちど眺めると、砂場の残骸は、また違った形に見えてくる。

子どもらが去った後の、園内の砂場は、まことにさびさびとしている。昼間の嬌声も歓声も消え、掘り起こされた跡、盛りあげられた跡、溝を掘った跡、その他の「跡」が言うに言われぬ意味を発信しはじめる。

毎日のこと、と見なすと、意味は消えてしまう。しかし、時には砂場の傍で、あるいは少し距離をとって、彼らの遊びの「跡」を眺めてみる——。

何かの素型として見えてくる。

「跡」の分類

その「跡」は、私たちの依って立つ観点によって、いくつかのグループに分類可能である。

平面的、立体的、空間的なデザインの「跡」のように見えてくることもある。少し言い方を変えて、これを二次元的、三次元的、四次元的と置き換えてみれば、「跡」の意味はもっとよくわかるのではなかろうか。

あるいは、もっとモダンな表現を使って、この「跡」をもって、建築、都市計画、環境デザイン、景観のディスプレイなどにひきつけて見ることもできよう。

この「跡」は、時間を逆のぼって、子どもたちがこの砂場で、何かを造型するために、その身体的機能を拡張し、なかまたちといっしょに情報を交換しながら、一つの秩序をつくり出していたプロセスをも物語ってくれる

だろう。

「跡」は、なお、左のようなことも物語りはじめる。

砂場の溝、山、穴などは、一つの表象として私たちに訴えはじめる。如才なき筋、共感のある山、失敗の川、無念の跡などのごとく。

しかも即時にわかるのだ。見てすぐにわかる。

この点は砂場の予想以上の重要なところである。砂で何かを形づくる。それがすぐに自分のもっているイメージにはねかえってくるからである。ひとつのパターンを繰り返しながら、それを洗練していく過程は、このことをきっかけにしている。

さて、「跡」をできるかぎり丹念に追ってみて、その意味を整理してみよう。「跡」が〈何かのように〉見えてくるのを読みとると、以下のように多様になる。

簡素化

あいまいな形を単純ながらも明確にしてみようとすること。「川」らしき跡と、「山」らしき跡をもとに、「町」をつくろうとしていたのだと判断したりすること。これはバラバラなものを一つに結びつけ、〈まとまり〉としてとらえようとする傾向のあることを示している。

この〈まとまり〉は、容易にできないこともある。〈まとまり〉を形づくるのを妨げるような、異形なものが存在し、うまく〈まとまり〉を形成しない。ところが、そのことがかえって面白く見えることもある。山の形とおぼしき頂あたりに、穴が掘ってある。「火山のつもりか？」と思わせたりする。片づけておく約束のはずだったシャベルがその頂点にのっかっていたりすることもある。

それが忘却のしるしではなく、「この山をくずすな」という子どもたちの意志表示だったりする。「仕事中！」というわけだ。

こんなことは、あとで子どもたちに確かめてみてわかることである。砂場の「跡」も、こうやってことばによって補なうことで一段と世界を広げてくる。

砂山の広がり

砂という具体物から表象の世界に入ると、「砂」は実に多様な熟語を呼び寄せる。「いさご」という古典的な表現、「砂丘」「砂州」「砂利」「砂金」「砂時計」「砂煙」「砂鉄」「砂塵」「土砂」「白妙」等々。

北原白秋の手になる「砂山」は、中山晋平の作曲したものと、山田耕筰が作曲したものの二つがある。新潟の海浜が舞台らしい。「荒海」を向うにした砂浜だから本当はさびさびした風景だろう。しかし、作曲者の力によって奥行きがつくり出されてくる。

石川啄木の「東海の小島の磯の白砂に……」の歌は、まるで映画のシーンが遠景からクローズアップに変わっていくような歌である。

「白砂」は、「砂」の特性を示すだけではあるまい。それは、それを「白」とさせている光をも表現していると考えることができるからだ。つまり、晴れている日のことなのである。雨の日の歌であるなら「蟹と戯る」とはいえまい。

この歌は、いまでは小学校の教科書のなかに載るようになった。そこで少々おかしな事態が生じた。「蟹と戯る」はわかるのである。しかし、小学生には、「我泣きぬれて」がわからないのである。「戯れて」いるのなら、喜々としてとびまわっているというのが彼らの常識であるらしい。こちらの方が第一印象として強く作用するものだから、「泣きぬれて」はつながらなくなってしまう。

つまりは〈涙〉というシンボルがロマン的な文脈を呼び起こさなくなったわけである。

〈に〉のこと

「白砂に」の「に」も問題である。

よく考えてみると、これも一筋縄ではいかない。歌の意味をたどってみると、「磯の白砂の上で」とか、「白砂で」とか、だんだん「に」とは違った横道に引っぱりこまれていくような気がする。「に」はホントにふんわかしている。

〈涙〉がわからなければ、この歌の翳(かげ)りもわからないだ

ろう。〈孤独〉もわかるまい。

疑えば「白砂」もシラを切っている。シロスナではなく、「シラスナ」。白梅、白菊、白雲、白子、白州、白滝、白土、白露、白波、白鳥、白羽。いずれもシラである。

「白砂」＝白い砂。それは白い色ばかりを示してはいない。この歌のなかでは、ここだけが色を示しているが、その白はまた、空しさやけがれのなさの象徴でもある。

「東海の小島の磯の○砂に……」の○のところに、別の色彩名を代入してみるとよい。「黒砂に」「赤砂に」などと。

小学生の時にはこんなことは余分な理屈である。意味だの、味わいだのを知らずとも、この歌を唱えてみて、どことなく、さらさらと流れていくような歌であることを味わえばよいのである。

海の浜で遊んだことがなくとも、幼稚園内の砂場で遊んだ経験があれば、何となくわかる歌なのだ。

現実にはことばどおりのまっ白な砂なんてめったにない。白っぽく見えるだけである。乾いた砂はそのように見える。が、まっ白ではないだろう。白堊のような白ではない。「白砂」とは、ゲンジツの砂というよりも、ことばが喚起するイメージなのである。ゲンジツとぴたりと対応するのではなく、少々黒っぽかろうが、黄色っぽかろうが、印象を一発で「白」と断じ、イメージにおいては限りなく白堊に近づけていく。

詩的言語にはそういうはたらきがある。

詩的なことば

このことがわかると、砂場で子どもたちが戯れているとき発することばの妙味を理解することができるだろう。ゲンジツに目前にあるのは砂の盛りあがったものである。

「これは富士山。これは海」といったことばは、砂の造型を契機に発せられることばである。ホントに富士山だと思っているのである。この浸入は想像力のなせるところである。模型、模像をつくり出し、シミュレートして

いる。それが「つもり」というものである。漢字では「心算」と書く。

詩的な言語は、日常用語の中から組み合わせを変えていけばよい。それは一つ一つとりあげれば、日常言語と変わりはない。しかし、問題は、一連のことばが詩的な文脈を紡ぎ出すか否かにかかっている。

子どものつぶやき、ひとりごとは、自己内対話のあらわれたものである。自問自答に近い。その過程は、手で材料と闘いながら、頭の中のイメージを形に表現していくのに相応している。また、なかまとともにコミュニケートしながら何かを形づくっていくのに相応している。

手の動きが繰り返しや反復の場合であるなら、つぶやきも繰り返しに近くなる。単調なリズムがそれに伴なって生じてくる。

砂の行くえ

いまでもふしぎに思っていることがある。

保育園や幼稚園の砂場の砂は、少しずつなくなっていくが、その多くは、子どもたちが靴の中に入れて砂場から持ち出すからであるそうだ。

遊んでいるうちに、知らずしらずのあいだに靴の中に砂が入りこむ。ひとりひとりは、そうやってわずかの砂をもち帰る。しかし、総勢ではかなりの量になろう。少しずつ砂は減っていく。当然補給しなければならないだろう。あれは、ふつうどれくらいの時間おきになされるのだろうか。

ひとりひとりの子どもが靴の中に入れたまま持ち帰った砂は、玄関あたりで払われる。時には用心して、外で払われ、そのあとで玄関に入るのを許される。これがまたふしぎなのである。毎日の掃除のときに、その砂は掃きとられるのかもしれない。

靴下や、ポケットにいつのまにか砂が入っていることもあろう。だから、砂は洗濯場で流されることもあるわけだ。

そのときの砂は、もはや砂場にあったときの砂とは異ったものになっている。当然外で払ってくるもの。それ

が家の中に入りこんできたのである。

「いやーね、こんなに砂をもちこんできたりして」

でも、砂だから、ぱらぱらと払えば除去できる。べったりとくっついている泥とは違う。

この違いは子どもにもわかっている。砂はよごれとは違っている。よごれではないのである。それが証拠にてのひらに載せても、手は汚れはしない。泥んこ遊びのときのように、爪の中にまで入ってきはしない。さらさらと滑っていくだけである。

この、くすぐったいような、こそばゆいような感触は、泥んこのべたべたした感じとは異なっている。ダンゴにはできない。ねばり気がないからだ。しかし、少々水を含んだ砂を盛りあげ、足で固めると、砂山はくずれなくなる。水分が粒と粒とを結晶のように安定させてしまう。ある限界をちょっとでも超えれば、また形はくずれはじめる。

砂状の土

私たちが「砂」と呼びならわしているものも、実はいろいろある。

「砂土」というのは八〇パーセント以上の砂のまじった土壌のことだそうだ。これよりも微砂で、粘土の多い土が「砂壌土」だ。砂が三〇から六〇パーセントで、これと粘土または有機物と混合されているのが「壌土」。

してみると、いわゆる「砂上の楼閣」なるたとえに出てくる「砂」は、これらとは別でなければ話が合わなくなる。純粋な「砂」でないと、諺どおりにならない。砂の上に建てた楼閣の基礎がやわらかくて顚覆(てんぷく)するおそれがあるというのだから。

でも、この諺は時間的に見れば、少なからず興味をひく。砂上の楼閣がいくらくずれやすいといっても、楼閣として一応は砂上に建てられなければならない。土台だけつくったらこわれたというのでは〝楼閣〟とはいえない。とにかく、いったんは完成した。そして短かい時間存続し、突然何らかの理由でくずれ落ちた——というの

でなければおかしいだろう。

子どもの感じ方に即してこの諺を解釈すれば、砂上の楼閣は何らかの警告を表現しているというよりも、砂上にどんな形で建っているのかいちどぜひ見てみたいと思わせ、ついで、できることなら、その楼閣がくずれ落ちる瞬間を見てみたいと思わせることだろう。

これは息をつめながら積木を積みあげるのに似ている。そして、はらはらしながら完成させ、完成したあとでくずしてしまうのに似ていよう。そこには、子どもらしい美学がある。

ことによると、あのバベルの塔なども、そういうきわどさを含んでいたのではなかったろうか。

「砂上の楼閣」とは、よく使われた割にはイメージのあいまいな表現であった。どんな楼閣なのか、形状や色がわからなくとも、せめてヒントぐらいはほしい。

何階もある高い建物、高楼である。例の「荒城の月」でも「春高楼の花の宴」とうたっている。もっとも、これは作詩者の土井晩翠の心に映った心象風景だし、また墨絵でぼかされたような風景のはずだから、砂上の楼閣よりも鮮明である。

砂の広がり

「砂絵」というのは、手にした砂を少しずつ地上にこぼして描いた絵。江戸時代にはじまった芸である。指先などで砂上に書いて習手の手本にして教えたのが「砂手本」。

「砂雲隠」は茶の湯につきもの。露地口の内部に自然石を置き、川砂を盛って、杖をそえてある。本来は貴人の用便のためのものであったが、今日では装飾的存在になってしまった。「砂風呂」は今日でも体験できる。「砂払い」とは、こんにゃくを食べると体内の砂を払うといわれている。本当に体内には砂が入っている。鶏の「砂嚢」を思い出させてくれる。

体内、とはいえないが、体内を思わせたのが汽車の機関車の上部にとりつけられていた「砂箱」などである。汽車が青息吐息で急勾配にさしかかる。すると、動輪と

レールとの間の粘着力を増すために、レール上に砂をまいた。その砂を貯えておく「砂箱」は、機関車のシリンダーの上部に、らくだのこぶのような形でとりつけられてあった。

動物の名に付されているのが「砂蟹」。「砂団子」をつくることでも有名である。そのほかに忘れてならないのが「スナメリ（砂滑）」で、これはクジラ目の海獣で、体長一・五メートルくらいの小さなイルカである。少々こっけいな名をもっているのが「砂潜（すなもぐり）」で、これはスズキ目の魚。体長は三十センチぐらいになる。「砂八目」は、川や湖に産するウナギの一種である。

植物の代表が「砂引草」。ムラサキ科の多年草で、各地の海浜に自生している。ハマムラサキとも呼ばれている。

すもうの土俵ぎわの見物席を「砂被（すなかぶり）」という。「砂がつく」「砂をかます」はすもう用語である。

あさりの味噌汁はおいしいが、時折砂が入っていることもある。砂をかむ思いとはここからきたのかもしれぬと思われるくらい情ない瞬間である。

夜の空の「金の砂子」とは童謡のなかに出てくる一節で、子どもにも納得できる隠喩であった。

（名古屋大学）

自然とのふれあい（その２）

――親子キャンプ――

斉　藤　芳　子

終戦直後の夏、保育者研修会が箱根の山であった時、朝もやに煙る野外で、世界的に有名な賀川豊彦先生のお話をきいたことがあります。

長い苦しい戦争で、苦難と忍耐のぎりぎりの生活をして生き残った身には、次第に朝もやが晴れあがって、浮き出てくる深い緑の山の偉容と、ふもとの鮮やかなあじさいの花の紫色は心にしみました。

その山に向って声を限りに

「山べに向いて我　目をあぐ
　助けはいずかたより　来るか
　あめつちの神より
　助けぞ　我にきたる」

と、目をうるませながら歌った心の感動を、忘れることが出来ません。

戦争と生きることへの心労で、日夜を過して来た生活の後だけに、忘れていた自然は新鮮であり、生命にみちみちていました。

「もろもろの天は　神の栄光をあらわし

大空は　みてのわざを示す」

思わず詩を口ずさみながら、山の自然を、目のうつばりの取れた思いで、深く息を吸って見直しました。

夏のキャンプのシーズンになると、今でもその時の感動を心に感じます。毎日の生活が忙しくなり、複雑になり、機械化され、合理化されてくるにつれて、ときどき郷愁のように自然を求め、自然の中に入りたいという本能的な欲求を持つことがあります。

生き生きした大自然の中で、きれいな夜空を仰いで、健康的な、解放された生活を味わいたいと思う気持は現代人の共通の思いではないでしょうか。だからバカンスには、海へ山へ、ハイキングへと出かけるのでしょう。

私達の幼稚園では、昭和三十八年の夏より幼稚園児の親子キャンプをはじめました。

場所は宮城県宮城郡利府町森郷惣の関にある、幼稚園より車で二十分位のところ。キリスト教森郷キャンプ場を、毎夏予約して、二十三年つづけております。山の中にある約二万坪のキャンプ場の鳥の村・花の村に、三段ベッドの九人入りの山小屋風のキャビンが六軒あります。松林の中には、新館や、グリーンチャペルがあり、山の中央に本館、礼拝堂、ホール、食堂、浴場、ゲストハウスなどがあり、約百人程が泊まれます。

ここで一泊二日の、寝食を共にする、家族的な親子キャンプをいたします。

自然の中の生活には、人為的な教材、教具は持ち込まず、自然環境を教室として、山や沼、森や小鳥、夜空の星や天の川などに心をとめて、ふれあう自然を教師、教材として、大自然の神秘性、科学性に気づくように、心を配ります。

キャンプ中は、親子で自発的に、散歩、観察、採集などの自然とのふれあいの時を持ち、親子と対話をしながら、学びを自由にします。勿論、先生のアドバイスを求

められたり、百科辞典は自由に親子で使っております。

うた

「森もお山もお日様も、お造りなさった神さま
なんてきれいな空でしょう
なんてきれいな、花でしょう」

おやつの集合の時は、大声でみんなで歌いました。森の広場で……

先生「森もお山も……森ってわかりますか」

子「わからない」

先生「森ってここですよ。こんなに木がいっぱい立っているところを、森というのよ」

子「わかった、わかった」

キャンプの最後の日には、キャンプ生活の感想や印象的だったことを、幼児には絵に、大人には作文に書いてもらいます。

・園児との話合いでは、

(1)キャンプファイヤーで歌ったり、花火をしたこと。

(2)お友達とキャビンのベッドで、一人で寝たこと。

(3)大きなお風呂で、大ぜいのお友だちと一緒にお風呂に入ったこと。

などが嬉しいようでした。

・父親の感想

(1)二日間、子どもとずっと一緒の生活をしたのははじめてだ。先生と子ども、子どもとお友だち、子どもの生活が十分観察出来て、父親としてこんな有意義なことはない。

(2)先生に、子どものためにも有給休暇を取れといわれたが、私のためにもなった。あくせくと仕事をするだけが能じゃない、と、他の人生もあるような気がしてきた。

などの発言がありました。

・父親の作文より

「園長先生の「東北の軽井沢」という言葉にひかれて、子供と一しょに参ったのですが、来てみて本当によかったと思っています。

仙台の近郊の交通も比較的便利な所に、こんな静かなキャンプ地があることは、実に意外でした。本館やキャビンの設備も、簡素ながらよく整い、管理に当っておられる方々や、またそれを利用している方々の行き届いた心遣いのほども忍ばれて、本当に気もちのよい一日を過させていただきました。

然し環境や、設備の良さもさることながら、来てみてもっと良かったと思ったことは、集団の中における自分の生活態度というものを、まる一日にわたって観察出来たことと、幼児教育を、宗教的なふん囲気の中で実践しておられる先生方の言行と、それを受け入れる子どもたちの態度から、反省しなければならない幾つかの事柄を考えさせられた事です。

とにかく思い出になる一日でした。」

・母親の作文より

「自然の尊さが、この様に私達親子に幸を与えて下さろうとは、今まで思ってもおりませんでした。忙しい毎日の連続で、子どもたちともじっくり一日を一緒に遊んでやることも少なく、この様な機会を与えて下さった神様のお恵みに感謝すると共に、本当に楽しかった一日を喜んでおります。

普段の家庭生活では発見出来ない子供の行いも、自然をバックにのびのびと、ありのままを全部出しつくしたような生活態度に、涙の出るような喜びを感じました。仕事を持っております私は、この様な行事で行われる、キャンプファイヤー、ゲーム、フォークダンスなど、数々の思い出もさることながら、一番の収穫は、たとえ短い一日でも、親子が一挙一動を共に楽しく過させていただいた事が一番の思い出として残るのではないかと存じます。子どもたちも初めて山小屋で、お友だちと一緒に寝たこと、楽しい童話、ゲーム、ダンスなど、よい思い出を得たことと思います。楽しかったキャンプ生活を本当に有難うございました。」

・父の句

昔した　ふき掃除する　へびり腰

（キャビン掃除）

子は寝ずに　大人だけ寝た　昼休み

（キャビンにて）

参加されたお母さんは、三食付で家事からの解放感と、大自然の中の解放感で、一日中子どもと共の自然のふれあい、子どもとのふれあいで、皆生き生きと若返って、子どものように楽しそうでした。

親子キャンプのねらいは、一番むつかしい大自然の中での日常生活の自然とのふれあいかた、自然に気づき自然を知ること、自然の中で遊んで学ぶことの生活の仕方を学ぶことです。自然の中で心のゆとりを取りもどし、親子で体験勉強や自発遊び、自立生活が出来たらとのねがいです。

夜はキャンプファイヤーが終ったら、子どもは八時就寝、自分のキャビンに帰って一人宛二段ベッドの下段に寝て、先生に童話の本を読んでいただき、眼をつむって静かにききながらおねむりです。

大人は別館の広間で、茶菓を真中に円くすわり、父母、祖父母の間に園長も先生も共にくつろいで、それぞれの話題に話がはずみます。お父さんの話には社会の視野を広められ、祖父母の話は実践的でよいアドバイスになり、若いお母さん方は互の教育の苦心談や質問、幼稚園のＰＴＡでは出ない活発な意見が出て、なごやかな教育懇談会です。

子どもの寝静まった頃、鳥の村・花の村のキャビンへ帰り、下段の子どもの独り寝の顔を見て、安心して上段のベッドにのぼってゆきます。

「こんなに早く眠るのは、はじめてだわ」などの声がきこえます。

大自然の夜の深いしじまにゆっくり寝て明朝早く、小鳥のさえずりを聞きに、朝の散歩をして下さい。

飛び立とうとする子らと

牛山佐智恵

六月初めのことです。私は年中のKと園内をあちこちまわっていました。Kが行きたがるのは、この子が年少のとき過ごした園舎で、ひとつひとつ部屋を見て歩いては、その南側にある土山に登って遊ぶのが、ここ数日のお決まりのコースでした。「やれやれ、きょうはずいぶん歩いたね」——そう言いながら連れ立って体育館に入ったとき、年長のOが人なつっこい笑みを浮かべて、こちらに近づいてきました。KとOとは、私のところでたまたま一緒に過ごしたことがあるという程度の関係でした。

Kはどうもクラスの子が怖い様子で、もうひと月あまり私のそばで過ごしていました。Kが園内を歩きだしたのは数日前からのことで、その心と体がやっと少しずつ動き始めたと、私も浮き浮きして、この子につき合っていたのでした。

一方Oの方は、このところ思いどおりにならない日を過ごしていました。というのも、Oのまわりでは年中のころからいざこざが絶えず、誰かれとなく手を出すOは

子どもたちから怖がられていたのですが、年長になってからはそれが急にこの子への非難に変わってきていました。

Oがこうして追いこまれることは、私たち保育者もまた追いこまれることでした。当面するいざこざに対処するために、私たちの気持ちは、Oが先に手を出したという事実だけで相手の子の方に傾きがちだったということを認めざるをえなくなったからです。この数日前も私はOと数時間を過ごしたのですが、この子を何とかわかろうと思いながらも、遊びらしい遊びも見つけられぬままでした。ところがこの日のOは、偶然会った私に、自分から遊びを提案してきました。

「ああ、疲れた……」——そう言って私が近くにあったマットにうつぶせになったとき、Oがすぐさま「あっ、飛行機にしよう」と叫びました。思いがけない言葉に、私は何が始まるのかドキドキしながら、うつぶせのままで待ちました。まもなくOは、空気でポンポンにふくらませた長さ二メートルほどの円柱状のクッションを持ってきて、それを私の肩のあたりに乗せると、「これ、羽根」と言ってその一端にまたがりました。誘われるように、Kももう一方の端にまたがりました。ふたりは羽根の両端に馬乗りになった形で床を蹴り上げ、一緒にポンポンと跳ね始めました。

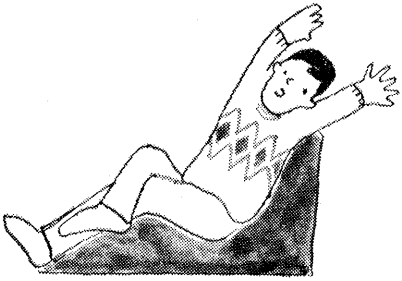
何回かそうして跳ねると、まずKの方が私のそばに寄ってきて、「もうギブアップ？」と頭の上から聞きました。Kはまたしばらく跳ねると、下の私をのぞきこんで、「もうギブアップ？」と聞きます。そのうちにOも加わって「もうギブアップ？」と聞くようになりました。私はふたりからそう聞かれるたびに、「まだまだ」と答えました。私がそう答えるたびに、ふたりは一層はしゃぎながら一層強く跳ねあがり、声をはずませて「もうギブアップ？」と聞くのでした。うつぶせの私にはふたりの様子は見えませんでしたが、その息づかいははっきりと感じとれました。

ふたりがやっと跳ねるのをやめたのは、体中汗だくになってからでした。ことにKは髪の毛までびっしょりぬ

れていました。かぜでもひかせたらと案じた私は、Kに「着がえたら」と声をかけたほどです。

ところがこの直後、思いもかけないことが起こりました。Kは自分のクラスにすたすたと歩いていったかと思うと、一か月以上もなじめなかったのがまるでうそのように、担任の先生や子どもたちと一緒に、さっと庭に飛び出したのです。それは、つい先ほどまで跳ねていた体が、そのはずみを残したまま動いていくといった感じでした。まるで飛び立つようなそのひとときを、私は自分の目を疑う思いで、遠くからながめました。

ところで、このときOが始めた遊びは、マットの上に横たわった私の体を、飛行機の機体にしたものでした。私はただうつぶせのまま、背中の上でふたりが揺らす羽根の振動に耐えただけでした。耐えたといっても苦痛があったわけではなく、むしろふたりが作る振動のままに揺れていたというのが実際のところでした。しかしそれだけのことが、なぜKにとって、これまでかかえてきた恐れのようなものを越える契機となったのか、私には不



思議でした。

「もうギブアップ？」と盛んに聞いたのはKの方でした。Oの思いついた遊びが、Kにはそう経験したことのない手荒なものだったのでしょうか。機体となった私にとっては耐えるというほどでないことでも、その上で飛び跳ねるKには、うつぶせのまま何もしない私が自分より無力なものと見えたのでしょうか。ただ、無力な状態ではあっても、自分のありたけの力を試すのに、そう危げはない相手ではあったでしょう。Kは思いきり自分の力を出し、その力を向けた私に「もうギブアップ？」と聞くことで自分の力を確認していったのではないかと思います。

それにしてもKが思いきり力を出すということは、私ひとりを相手にしていたのでは、まずありえなかったことのように思います。Oの思いついた遊びが、その手荒さゆえにKに思いがけない力を出させ、その勢いに乗って自分が強まっていく体験を引き起こすことになったのではないかと思います。

今思うと、盛んに「もうギブアップ？」と相手の様子をうかがうKの遊び方と、この子がクラスの子を怖がってきたという事実は、無関係ではない気がします。相手の様子を確かめることで自分を確認していくという対応のしかたは、相手の状況によっては不安や恐れにつながることにもなるからです。だからこそKは、うつぶせの私のような相手、つまり自分を脅かすことなく自分を確認できる相手を求めていたのだと思います。

そんなKに比べて、Oの方は相手の状況にはむしろ疎い子です。しかし、Oもまたこのころ、自分を脅かすことのない相手を切実に求めていたひとりでした。

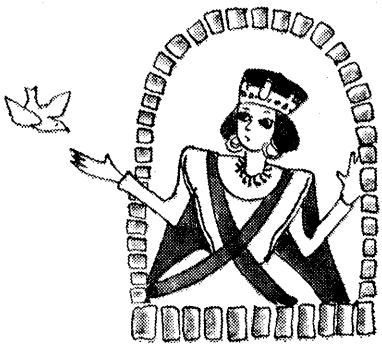
Oは気に入ったものがあれば相手にかまわず手に入れようとするし、友だちが楽しく遊んでいる最中でもひょいと手を出して中断させるというように、頻繁にいざこざを起こします。実際、Oの対応には明らかに相手のじゃまになる位置に足を投げ出したり、相手の動きがまるで目に入らぬとでもいうように、そのすぐ目の前を横切ったりするようなことが目立ってあります。ですから、

たとえ何事も起こらないときでも、衝突の原因になることはいくつもかかえこんでいるように見えるのです。手を出せばいざこざが起こり、その対応を非難されだしたOにとって、たまたま背中を向けて横たわった私の体は無防備で、ちょうど飛行機の機体のように警戒することなく遊べるものであったのかもしれません。

Oはしばらく飛行機の羽根にまたがって跳ねた後は、方形のクッションを持ってきて、それを私の腰の上に乗せました。それはちょうどKが「もうギブアップ？」と私の様子をうかがっていたときのことです。OはKの動きにつられてか、再び羽根にまたがると飛び跳ねることを続けました。

Oの遊びには、Kのように相手の様子を確かめつつ自分を確認していくといった対応は、おそらくそうなかっただろうと思います。それが「乱暴」と非難されるいざこざを生んでいたとしたら、Oにとってこの日のKとの遊びは新しい体験であったかもしれません。私にとってもこの日の遊びは、まるで違う遊び方をするふたりの子の間にあって、本来子どもが大人に求めているものを示唆されたような思いを残す体験となりました。

三日後、Oはビニール袋に手製の手裏剣を十二個も入れて、私のところへやってきました。Oからの初めてのプレゼントでした。



子どもの遊び（その8）

E・A・A・フェルメール
浜口順子訳

（三）遊具の意味

今度はイメージを表象させ、その表象がイリュージョン的遊びを誘発する遊具について考えていくことにしよう。たとえば猛獣や自動車のおもちゃ、人形、人形用の家などの遊具がそうである。これらの遊具は子供を空想へと誘ない、あるテーマ（主題）となるイメージを喚起させる。そうしてイリュージョンの世界が現れてくるのだが、これは子供が日常生活で経験したことのあるものと相似的な関係（アナロジー）にある。この点でまず、感情的アナロジーが考えられる。子供が人形ごっこをするのは、現実生活を模倣するためにではなく、ある体験的雰囲気を表現するためである。日常的現実から生まれた情感は、イリュージョン的遊びのもとになる。輪回しの輪、ボール、積木やビー玉などの、「のような」とい

う相似的現実を表象させない遊具と、本章で扱う空想のテーマとなるような遊具とを区別しておこう。もちろん積木でも子供は空想的世界を呼び起こすことができるし、それは日常生活で使われる諸々の品物についてもいえることではある。が、ここで限定しようとしているのはテーマ的遊具の誘発的意味についてであって、これは現実生活にあるモノの縮小物（ミニチュア）——おもちゃの電車、ミニカー、人形用の家具など——である場合が多い。「縮小」によって距離——自由——が生み出され、いわゆる「のような」という世界が、本物そっくりの世界とか現実的・非現実的世界などと同時に、喚起される。

本物そっくりに作られたおもちゃにひかれるのは、主に、現実主義者の小学生たちである。もっともいったん遊び始めてしまうと、子供は遊具が本物によく似ていようといまいと、遊具を批判的な眼差しで見ることを忘れてしまうのだが。色とりどりに絵の具の塗られた木製の機関車より、金属性のものの方が子供心をひきつけるだろう。遊ぶのに木の方は子供っぽく見えてしまうからだ。

本物そっくりに作られた遊具も、子供ひとりひとりの体験を生かすためには、あらかじめ遊具に与えられている意味の他に自由な意味付けが求められており、つまり、両義的な特徴をもっていなくてはならない。電車のおもちゃで遊ぶにしても、子供の空想が「電車」というテーマに固着せず、イリュージョンの世界へと広がり飛翔する翼が必要なのである。だから遊具が遊びに決定論的な誘導性を示唆しないでもいっこうに構わないのだ。「完璧な」遊具がこのような決定的方向性を与えてしまうおそれは、たしかに想定され得る。どうしてこのようなことがあるのか、考えてみよう。

遊具の誘導的意味を判断するには、子供の創造的活動性から考慮する必要がある。おもちゃ箱がいっぱいになっているのに、飽きてしまっている子供。彼らのファンタジーはあまり創造的ではなくなっている。選択項が多すぎると、かえって魅了されにくくなるのだ。ブロンテ

家の子供たちが、兵隊の人形たちのはいった二、三の箱だけを出発点にして、彼らの豊かで多彩な子供らしい空想を広げ、そこから後年の文学的創造性の基礎が育まれていったという話がある。別に、すべての子供たちに同様の才能を期待しようというわけではないが。ところで、飛行機や自動車などのおもちゃで遊びながら、あるテーマ（衝突、墜落・転倒など）が一貫して現れる場合、どのように考えることができるのだろうか。テーマ的遊具からの遊具的なアピールなのか、それとも情動的にその特定のテーマへ固執せざるを得ず、ヴァリエーションや即興などを働かせて自分のイリュージョン的世界をそれ以上進展させることができなくなっているのだろうか。空想的ヴァリエーションがあまり見られず、一つのテーマに縛られたままになっていると、遊具自体が与える印象的影響を受容できるような状態を回復できない。一例を示そう。

ある少女が誕生日に新しいお人形をもらった。両親は少女がその人形を、前からもっている他の人形とは違って、意地悪く、手荒に扱うことに気づいた。殊に彼女が無意識的な空想にふけっている時に、そうした残虐性を帯びた遊びが見受けられるのだった。極立った特徴もないその新しい人形が、なぜこのようなテーマを少女に呼び起こすのかと、両親が不思議に思ったのも無理はなかった。しかしこの遊びも、もとはといえば——仕方のないことだが——両親がもたらしたものだった。つまり少女の生活で起こったある出来事——妹の誕生——が彼女の情動を揺さぶっていたと考えられるのである。この場合決定的な誘発剤となったのは遊具自体ではなく、日常生活における情動的な体験であった。この時点で、新しい人形というテーマ的な遊具は、単に触媒的な働きをしていたにすぎない。情動的な反応性が強すぎると、自由に創造性を切り拓く可能性が縮小する。

プレイセラピーにおいて、テーマ的遊具が複合的体験（憎悪と親愛、攻撃と保護など）のシンボルとなり、その一方が表出されてくることが知られている。子供が屈折した感情の矛盾性から、自分を解放することができな

い限り、遊具そのものではなく、(体験的内容と結びついた)体験が遊びを導いていくことになる。たいていの場合、憎悪や攻撃性などの、感情を複雑化させる側の要因が遊びの中に表現される。こうした感情的葛藤から自由になるプロセスで、テーマ的遊具が遊びを誘発するのである。創造的自由は、子供がもはやこの感情的な体験の領域に縛られなくなって初めて生じる。ここに、テーマがイリュージョン的遊びに結合しても、遊具のもつ誘動的性質に必ずしも影響されているとはいえないことが示唆されている。

しかしながら、テーマ的遊具が中立的な遊び対象であると推論するつもりはない。むしろそこからは強烈な暗示が与えられている。しかしそれは遊具のもつ両義性の中に相殺されてしまう。だからこそ遊具から明確な距離を保ち、中立的関係を結ぶのは不可能なのである。モノは挑発し、子供の創造的な自我がまだ十分強力に対抗できないような感情的体験の部分と結びつく。例えばおもちゃの電車は、おもちゃのガンよりも子供を自由にする。なぜなら「射つ」というのは、「電車に乗る」ことよりも情動性の強いテーマであるからだ。テーマ的遊具は、その直観的特徴が顕著であると殊に強烈な暗示を呈する。前に、年長児が、木で作られた派手な色彩の電車よりも金属製の電車の方にひきつけられることにふれたが、鮮やかに色付けされた木製のガンが金属性のガンになることで変化するのは、実際のガンとそれだけ似てくるだけではなく、そのおもちゃによる感情的体験の中に許容される「戯れ」性と自由とが減少するということであろう。本物そっくりに作られた模造的な遊具になると、その両義性は消え失せ、もはやモノとして真に挑発してくることはなくなる。

おもちゃが両義的な特質を失うと、子供はもうおもちゃで遊ぶことはできない。そのかわりモノの方が子供を動かすようになる。特にそのテーマが子供の感情的な負担と結びついているような欲動的な傾向に働きかけている場合はそうだ。その場合、個人的な体験とは関係なく、攻撃性が暗示されるようになる。親が本物そっくり

のおもちゃのガンを子供に与えたがらないのは、それなりに正しい。それはこの種のおもちゃが時として実際に弾丸を射つことができて危険であるからだけではなく、親が守ろうとしている子供の自由を阻むものを、子供のイリュージョン的世界に招来させてしまうからである。

以前、おもちゃのガンがもつ危険性とは別の意味で問題性をはらむ遊具が市場に現れたことがある。それはギロチン台を作れるブロックのセットで、首にバケツを吊るした人形も付いていた。組み立て方法はあらかじめ決まっているので、子供側には何の創造性も必要とはされていなかった。その結果できあがるギロチン台は、一貫した十全なる意味をもち、両義的意味を暗示してはいない。子供の空想的世界が受けるギロチン「執行」の直観的印象は、その攻撃的な体験を子供の欲動性に駆り立てる契機になり得る。子供がこういうおもちゃを欲しいと思う気持は、したがって、前個人的な (sub-personal) 領域で形成されるものだ。

子供の遊びの中でテーマ的遊具は、ある言葉を語りかけている。遊具からの暗示や誘導が一義的なものにならず両義性を保つときに、子供はそのテーマを独自の仕方で体験し変容するように促される。子供がテーマ的遊具に自分のイリュージョンを映し出し、またそうするように自己の態度・世界を創り上げていくというのは意義深いことだ。その世界は、本物の現実的な世界とは別の、子供の個人的な世界であり得るのだ。

しかし遊具が前面に出すぎると、子供は個人的体験をその世界に表現し、イリュージョンを形態化することができなくなる。

親が子供のおもちゃを選ぶ場合、子供のイリュージョン的世界について親が物申す権利を保障されているのかどうかという問題がある。子供が遊具のテーマを自由にあやつれるとはいえない。親が子供に遊具を与える際、こんな風に言うだろう。「それでまあ遊びなさい」と。こうした承認的言動において、親が遂行しているのは発言権ではなく、責任である。なぜなら遊具を与えた時点

で、子供はすでに完全に自由ではなくなっているからだ。

(四) イリュージョン的遊びにおける人格の形成と保育

子供は親からもらった遊具で遊ぶばかりでなく、日常生活から借りたモノや出来事などでも遊ぶ。現実はいつも空想への出発点であり、イリュージョン的世界を築いていく。そこには日常的な世界よりもたくさんの可能性が秘められており、子供の情動性に満ちた体験を、より自由に位置づけることのできる場となる。

親はその自由をできるだけ子供に認めようとはするが、その際の親の責任が問題になるのだ。親は日常的世界を必ずしも教育学的な場として前もって用意しておいてあるわけではないし、また子供の遊ぼうとするテーマが親の検閲にいつも堪えるわけでもない。ままごとや戦争ごっこ、学校ごっこ、病院ごっこ、お店屋さんごっこ、事故遊びなどのごっこ遊びは、子供にとってどんな意味があるのか。

お葬式ごっこなどは親にもまだ理解しやすい。しかし空想（イメージ化）がそれほど明確でなく、部分的にしか行動として表わされないと、子供があるテーマに執着しているのは何故なのか、「病院」、「事故」、「火事」などのテーマによってどんな情動性が子供の内面性を衝き動かしているのか、親には見当もつかなくなるだろう。子供はただ「のような」という相似的世界に喚起されてばかりいるのではなく、そのプロセスで同時に自分の態度を選択し、つまりそこでのダイアローグ（対話）を通して自己を形成している。こうした遊びが時たま見受けられる程度であれば、親はそれを気にかけることもないだろうが、子供がのべつ同じ遊びを繰り返すようになると、親は「何か他のことをして遊びなさい」と言わなければいけないような気になる。それに対して「でもこれで遊ぶんだ」と子供が答えるにせよ、親が納得できるような言い訳になってはいない。子供は解き放たれた自由

さの中で遊びに取り組んでいることもあれば、自分を感情的葛藤から解放するために遊びを必要としてやっていることもある。しかし子供はまた、親がその意味に到達できないような秘密の場所へと、自らを引き込んでいるのではあるまいか。だからこそ子供は「でもこれで遊ぶんだ」と言い訳できるのではないのか。でもこの言い訳は妥当なのだろうか。情動的な体験に対する新たな態度形成ができるように親は子供を助けたいとは思っていても、もはやそのような情動性から子供自身は解き放たれてしまっている、という状態もあるのではなかろうか。

親は子供が個人的な世界と個人的な態度を形成するのを援助する。親は、子供が親に同一化する方向へと子供を導くが、子供は自立的になればなるほど、自分のイリュージョン的世界を親に対してシャットアウトしようとする。しかしそこで子供が採用する諸テーマは、親もまた参与している共同的現実に根ざしているテーマなので、子供が遊びをいくら私的な領域と見なそうとしても、親はその責任から完全に逃れるわけにいかない。とはいっても子供が共同世界に由来する諸テーマを採用する際に、依存性から必ずしも自由であると感じているわけでもないのだ。

共同的な世界は次第に子供の眼前に開けていく。家の外の世界が大きくなると同時に、家庭的環境と外とをつなぐ「窓」と「ドア」ができて、子供の目と耳とが、その時代の子供として成長していくことを余儀なくさせる。そのプロセスで、イメージ化を刺激する様々な事物に出会う。大きくなるにつれて、子供はわくわくするような本を好んで読み、漫画やテレビのストーリーも子供の空想的生活を豊かにする一端を担う。しかし情報媒体の中には、見聞きする者を魅惑し圧倒してしまうようなテーマを作り出すものもある。そのため、劇的・暴力的イメージが、遊びや現実の中の行動にどんな影響を及ぼすかについてデータを集めようとしている者もあるが、こうしたことは可視的に証示され得ない。ましてや子供の個人的意味付与——子供のイリュージョンや内的態勢——にこれらのイメージがどんな作用を及ぼすのかを明らか

にするのは困難なことだ。だからといって「影響なし」と断定するわけにもいかないが、この点について親ならば正しくもっと多くを知りたいと思うだろう。

感情的なインパクトを与えるテーマは子供にとってどのような意味があるのか。子供は遊びながらテーマに直面する必要があるのだろうか。子供はテーマを自由に変容させられるのか、それとも解放への欲求がいつも誘発されるように、テーマの方が子供よりも優位にあるのだろうか。子供は自分の人格をイリュージョン的遊びの中で大部分形成していくが、それをわれわれがどの程度把握することができるのかを追求してみよう。

年長の子供は、葛藤的感情が呼び起こされるような遊び世界において、すすんでスリルを追い求める。ヒーローと非ヒーローの住むイリュージョン的世界を喚起し、何が許され何が許されないのかを探索していく。しかし遊びながら、子供はひとりで冒険に身を賭しており、少なくとも大人の助けを求めてはいない。

成長するにしたがい子供は次第に現実主義的になって

いくが、それと同時にイリュージョン的遊びがイメージ像を獲得する場を、共同的な現実（世間）からはおおい隠そうとする。親密さや秘密などの魔術的な領域を守るのに必要なモノに、特別な価値付けがなされる。たとえば古シーツは、インディアンのテントやままごと遊びの中で奇跡を起こしてくれる。子供は親密な世界の雰囲気や出来事を、外界から遮断する。また家から離れた所でも、秘密の空気を体験する。活動領域を広げて探索するのは、少年たちの大好きな冒険である。その時、父親や母親などの家庭内の人物たちは外界にうごめく人々となっているのに対して、もっと遠くにいる人物たち、たとえばインディアンや騎士、王子や王女様たちが一緒に冒険を繰り広げるのだ。そこは時間と空間の枠組を超越した世界で、少女たちは実になめらかに白日夢の世界を泳ぎ回っている。こうした世界に住み込んでいる人物たちは子供たちと親密な関係にあり、子供はそこに表象された美的な情景に溶け込み、登場人物たちの英雄的行為や恐怖の体験などに同一化してしまうことができる。しかしイメージ化が昂じて、不安を招来する程にまでなると、同一化は失敗してしまう。イリュージョン的遊びは、まどろみと覚醒とにはさまれた表象的世界で生まれ、その範囲を逸すると、既知性・信頼性という支えを失ってしまうのだ。

ここまで見てきたように、時には子供を圧倒しそうにもなるイリュージョンの中で、自らを賭す冒険的活動を通して自由を獲得しようとするのは、人間の子供であるからこその行動である。子供はその時秘密の世界に直面し、空想の脅威的な側面から、自立的な態度を試されているともいえる。遊びはここで、子供の人格を形成すると同時に未来へと投企させる、挑戦的な場になっているのだ。

子供が遊ぶのは、大人が舗装した共同的現実に通ずる道路を跡づけていくことではない。親密さや秘密、庇護性や自由などから成る全体的な雰囲気に漂いつつ、遊びの中では、価値の相互矛盾的な二極分化が起こっており、人間の善と悪（価値の問題）をめぐって子供がダイ

アローグを続けている。そうして子供は、イメージを喚起する価値世界の上に、前意識的な態度を形成するのだ。

子供が成長するにつれて、イリュージョンとして遊びという行動を外界に表出することは少なくなる。子供は白日夢とファンタジーの世界で、イリュージョンを内在化させて実現するようになる。自己省察が可能になる青年期にも、まだ個人的な意味をイメージ化の世界で具象化しようとするが、イリュージョン的遊びは次第になくなる。子供期の終了と共に、それもまた消滅するのだ。

（了）

《原註（抄）》

① 自由という語は、意味付与への自由として使っている。テーマ的遊具について論ずる際にもこの自由が問題となるが、さらに自由と結びいている前提条件についても言及している。またテーマが子供の意味付与を固着させてしまう場合には、自由の阻害について論じた。「距離」とは、共同的現実の中にあるモノが担う一義性から、子供が離れられることを指しているが、ここでは直観的印象の強度が減少することをも意味して使った。情動によってひきずられてしまうことは、個人的意味付与の障碍となる。

②「隠れた場所」の秘密性は、個人的意味付与における二極複合性の条件になっていると思われる。（「その7」原註①）安全な家という根源的な庇護性から脱出することができるようになるのは、子供の自立性の成長を示しているが、その際子供は個人的世界において新しい庇護性を創造することができるようになってもいる。（O・F・ボルノウ著『実存主義克服の問題―新しい庇護性―』未来社）新しい庇護性とは単に秩序やルールを整えることだけではなく、子供ひとりひとりが独自に価値との関わりを形成することでもある。

（お茶の水女子大学大学院）

兎園随筆㉖

出会い（その2）

―光る沙漠―

蕪木寿江

水柱から溜る盥（たらい）の水は冷く、お弁当のトマトが密かに冷やしてあったり、はんかちに包んだ牛乳瓶がたてかけてあったりした。その水に手拭をつけては頭の上にのせて話を聞いている人もいた。冷房完備の多い現在では考えられないが、本気で自ら学ぶのには相応しいお茶大の講堂であった。次の年の夏は真中の前から三番目という特等席を陣取った。千五百人いたのだろうか、折たたみ椅子もでて身動きもできない空気の中で周郷先生の話を聞いた。そして、「光る沙漠」の矢沢宰を知った。

ききょう　十四歳

おまえは
本当に健康そうだね
つぼみは
ちょっとさわれば
はじけそうだね

あきらめ　十五歳

あきらめてはならぬものを
あきらめて
あきらめてよいものを
あきらめず
こんなのがわたしの
なやみのたねになっているのでしょうか？

おれの中に……　十六歳

おれの中に
もう一人

すばらしい
人間がいて
そいつと
しっかり
手をむすんで
生きて
行きたい

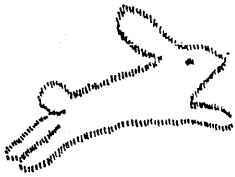
まよい　十六歳

さわると手のきれるようないとを
心のなかにはってまよいをくいとめたい

詩を書くから……　十六歳

詩を書くから悩むのか
悩むから詩を書くのか
そうだ俺は悩むから
詩がうまれるのだ

宰少年に語りかけるような先生の低い声に、一言ものがさずとノートをとった。帰りの電車の中でも広げては何べんも小声で読んだ。その詩の中にすっぽり入り込んで一時間余りの電車を降りた時には、自分が又違う世界からきたような気さえした。宰君は小学校も五年の二学期までやっと通い、二十一歳の若さでこの世を去る迄、何がこの少年を育てていたのか——。死後宰君のお母さんが、当時(四十二年)毎日新聞に連載していた「母と子のうた」の担当をしていた周郷先生に十二冊の詩のノートを送ってこられた。詩人の多い中で先生を選ばれたところに人との出会いの神秘さを思う。先生に出会わなかったら五百編の詩も、十四歳の十一月三日から一日も欠かさず書き続けた日記帳も、そのまま新潟の彼の家に蔵まわれていたかもしれない(高校や病院の先生方で小さな出版はあったが)。



先生の恩師である内藤濯先生も、邦訳した『星の王子さま』に比べ得るものだと言われ、「矢沢君は自分の中に学校を持っていた」と話されたと伺った。

僕から　　十六歳

僕から
イエス様を
とり去れば
僕は灰になる
僕から
詩を
とり去れば
僕は灰になる

「光る沙漠」のあとがきにも、
『君の詩は、(戦後の)日本語の退廃、崩れを救ってくれる！　それは日本人を生きかえ

らせることだ。「詩がよくならない限り、日本の教育も政治も望みはもてない」親しかった詩人山之口貘さんと私は、生前、敗戦後間もない時分、池袋のコーヒーの店でよくこんな話をしていた。いま私はそのことを思い出す。君はそれをやってくれた。しかもそれらの詩の大半は、まだ殆んど寝たっきりの十五、六歳のころに書かれたものだった。「学歴」などはなんの関係もない！――これはまったく驚くべきできごと(event)だ！　私は、十五、六歳という年令がどんなに大切な年令かを改めて考えてみた。そうして幼年時代の自然との対話の大切さを……これは誰にも、振りかえってみて、思い当ることだろう。イエスは十二歳になって、神の子であるという覚醒をみせ、孔子は「われ十五にして学に志し」た、と言った。それを、この年令で試験勉強という「獲得競争」にこの大切な時間を

使うとは、なんたることだろう。「獲得のための教育」はもう〝じつは〟終っている！――「死んで」いる、のに……。』

十四歳

一本のすじ雲

このはてしない青空に
何かと何かを結ぶかのように
夕日で銀色にそまる
僕は好きだ　この一本のすじ雲が

『この「……何かと何かを結ぶように／夕日で銀色にそまる……」〝すじ雲〟に、君は〝いのち〟というもの、宇宙に遍満する〝愛〟のすがたを見たのだろう。この翌年の盛夏に、君に「詩」をえらばせ「日記」を書かさせる決意をさせた。』

『君の詩は伝説のように大きく深い調べがあり、中原中也や八木重吉、啄木の影響をつよ

く受けたが、それらを越えて、まったく新しい現代のものだ。シモーヌヴェイユが「ロンドン日記（一九四三年）に書いている「詩」の定義「アタンシオン（attention）を磨き、とぎすまし、それによって人が宇宙を冥想しそこへ参加する」が、君の詩にぴったりしているように思われる。君は死とたたかい「死との対話」を通じて〝あきらめる〟のとちがった道を選んだ――人間を超える道を……。』

『十六歳の四月二十一日の「日記」から、八月にかけて〝神学問答〟〝宇宙論〟のようなかたちで展開される。拍手を送りたいほどだ。私は、そういう若い君にティヤール・ド・シャルダンの片鱗を感じるのだ。』

小道がみえる……　二十一歳
小道がみえる
白い橋もみえる

みんな思い出の風景だ
然し私がいない
私は何処へ行ったのだ？
そして私の愛は

（絶筆）

『私は君との〝出会い〟を今さらのように感謝したい。この〝出会い〟をみんなのものにする仲立ちができたことを心からよろこびとする。』

すっかり先生に魅かれ、先生が講師の夏期研修会場を探し、紙聞紙上で見つけた長野県で行なわれる朝日保育大学に行った。市ヶ尾の御一行様（？）の泊る部屋は、その日迄物置になっていたところで夜はゴソゴソとねずみとごきぶりと蚤の襲来――。寝不足のまま諏訪の会場に向い、聴いている時は不思議と

かゆみはなく、休みの時間はかゆくて眠くて困った。先生は二度同じ講演はなさらず、常に学んでいらっしゃることをお話なさるので、この日にはこの日のことしか伺えず、誰もが集中し全身神経になった。

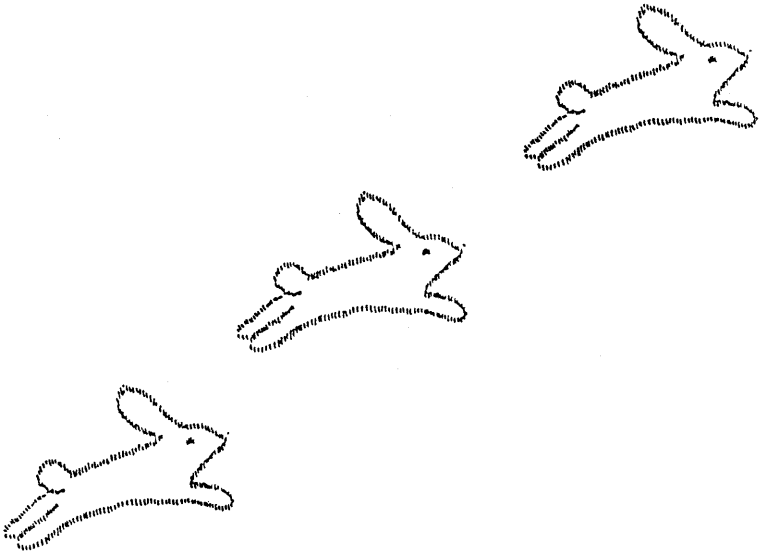
秋風が立ってもかゆみは去らず、掻いては先生を思い出していた。

（市ヶ尾幼稚園）

引用図書

『光る沙漠』（童心社）（沖積社）

『足跡』（童心社）



倉橋惣三の演劇教育論 (2)

冨田博之

子ども時代の環境と体験が土台に

「美術教育」や「音楽教育」に比べて「演劇教育」という用語や概念は、わが国ではなじみがうすいものといってよいだろう。「演劇教育」は、わが国の教育界では、まだ市民権を得ていないことばといってよいかもしれない。それはなぜかを考えれば、もちろん、それには理由があるわけだが、ここでは、それには深入りしないことにしよう。それは、幼児と演劇とのかかわりを考える上からも、基本的に重要なテーマだと思うが、それは機会を改めて考えることにして、ここでは、美術教育や音楽教育でも、創造と鑑賞とは、盾の両面、ないしは車の両輪をなす関係にあるのと同じように、演劇教育でも、子どもの創造の活動と、鑑賞の活動とには、切っても切れない関係があることを確認しておきたい。

いま、演劇教育をまじめに考える人ならば、当然のこととして鑑賞教育の大切さを知っている。だが、そのことを、幼児教育のなかではっきりと主張し、実践と結びつけて提唱した先駆者は誰かをふりかえってみると、やはり、倉橋惣三をあげなければならない。

倉橋が幼児の演劇教育としての「劇あそび」という概念、ないし活動の先駆者だったことは前述したが、彼は、鑑賞教育についても先駆的な役割を果たしているのである。

倉橋が幼児の演劇鑑賞教育について意識的に考えるようになったのは、一九一九年から二二年にかけての文部省在外研究員としての欧米視察旅行の見聞から受けた影響に始まるとみてよいだろう。後述する彼の演劇鑑賞教育の実践ともいえる東京女子高等師範附属幼稚園での「お茶の水人形座」を始めたのは、外遊からの帰国後、同幼稚園主事に復帰した後の一九一三年（大正12）ごろからのことだ。

だが、それ以前に、倉橋には、子どもの時代から歌舞音曲などにしたしむ家庭環境があり、人形芝居などの芸能を愛していたという、いわば芸術的教養にめぐまれるという素地があった。

倉橋は、代々、徳川家の旗本だったという家に生まれた。父政直は明治新政府の判事をつとめ、後に弁護士を開業した法律家だったが、多芸多趣味の通人といった人であり、母とくも父の影響を受け芸事をたしなんだ人という。倉橋が晩年に書いた自伝的エッセイ集といってよい『子供讃歌』（一九五四年、フレーベル館刊）には、少年時代を過ごした東京の下町、浅草のふんいきとともに、「義太夫に凝り、歌沢に凝りという多趣味であった」父と、その相手をして三味線をひく母か

ら受けた影響について書かれている。

「父母が劇場や寄席へゆく時も、よく彼（惣三）をつれていった。それも、父の好みから、いわゆる団菊左の外に、当時の団蔵とか歌六とか源之助とかの渋い舞台が多く、円喬や小土佐や橘之助の高座が多かった。決して児童芸術教育とはいえないものだったが、高等学校や大学で、キザな連中のナマな演劇活動やドロ臭い江戸趣味論に仲間入りしなかったのも、こういう教養（？）の下地のせいだったかも知れない」などとも回想している。

倉橋が、後に、幼児の演劇鑑賞について深い理解を示し、保母たちといっしょに、子どもたちのために人形劇を演じたりするのも、こうした彼自身の子ども時代の体験が下地になっていたのである。

一九二三年（大正12）ごろから、東京女高師附属幼稚園で始めた保母たちによる「お茶の水人形座」の上演台本をまとめて出版した『幼児のための人形芝居脚本』（菊池ふじの・徳久孝子共著、一九三〇年、フレーベル館刊）の序文を倉橋は書いているが、その中で、つぎのようにのべている。

「人形芝居は私の元来の趣味の一つで、子どもの時から、それが大好きだったし、現に大人の為の人形芝居にも相当深い興味を持っている。それで、つまりは、自分の好きなものを、可愛い幼稚園の幼児にも見せてやり度いというのが、この小さい舞台になったのである。であるから、必ずしも一々やかましい理論が基礎になって考察せられた訳ではない。子どもが喜ぶようにといふのが、最高最低の基準であったにすぎない。」

理論が基礎になったわけではないといっているが、倉橋は、「お茶の水人形座」を始めた時期に、主幹をつとめる日本幼稚園協会の

機関誌『幼児の教育』誌に「創造性と鑑賞性」（一九二四年五～六号）という論文を書き、鑑賞教育の意義を考察している。倉橋の鑑賞教育は、単に海外での見聞に触発されて始めたというのではなく、彼の子ども時代からの体験と教養にうらづけられたものが、たしかな土台となって実践され、主張されたものだったのである。

ロンドンの〈クリスマス・パントマイム〉

先に引用した『幼児のための人形芝居脚本』の序文のなかで、倉橋は、「その頃、私は丁度、外国の旅から帰った当座であったから、その人形芝居の考察の中に、ヨーロッパで見た、いろいろの人形芝居が参考になっていたのはいうまでもない」と書いている。倉橋の、まとまった評伝としては唯一のものである坂元彦太郎の『倉橋惣三・その人と思想』（一九七六年、フレーベル館刊）には、「彼が外遊から帰って、いわゆる人形劇を紹介して、それがギニョールの人形劇が日本の幼稚園でひろがるもとになったといわれる」と書かれている。

しかし、彼の自伝的エッセイ『子供讃歌』（前掲）には、「霧の日の子供劇場とハイドパークの子供の池」という章があって、冬のロンドンの子どものための劇場については、その演目や客席のようすなどまで、かなり詳しい記述がみられるが、人形劇については書かれていない。

子ども劇場については、つぎのように書かれている。

「霧の多い冬、ロンドンではいろいろの子供劇場が興行される。相当の大きさの中劇場で母子づれの美しい観客が、いつも満員になっている。（中略）出しものはありふれたお伽

噺を劇化したものが多く、たとえばピーター・パンとか、シンデレラとかいった類だが、軽いミュージカル・プレーに仕組んで、おどけ入りで賑かに笑わせるが、下卑ていないのは子供らといっしょに見ていて快い。小学校中級から幼稚園くらいの子供が多く、服装も、髪も、幼いながら英国流の品をもって、大部分が母とならんできちんとしている（下略）。」

これは、かつて英国に留学した夏目漱石も一九〇一年（明治34）三月にそれを見て日記に書いているという〈クリスマス・パントマイム〉とよばれる、イギリスでかなり古くからおこなわれている子どものための芝居であった。これについての、ほとんど唯一の専門的な紹介の文章の筆者である英文学者の升本匡彦は、つぎのように書いている。

「イギリスには『パントマイム』Pantomime（単に『パント』Panto と略称される場合もある）の名で総称される子どものための芝居がある。クリスマスの季節に上演されるのが普通なのでクリスマス・パントマイムと呼ばれることが多い。イギリス人なら誰でも知っているお馴染みのストーリーを中心に展開する歌あり踊りありの賑やかで楽しいお芝居である。」（「クリスマス・パントマイム」『演劇と教育』一九八〇年一二月号）(1)

パントマイムといえば、わが国ではことばのない「黙劇」としか理解されていないが、イギリスの〈クリスマス・パントマイム〉は無言劇ではなく、「台詞に満ち溢れた騒々しいお芝居」であり、一八世紀の初めからおこなわれ、一九世紀の後半から子どものための芝居として定着したものという。

「イギリスの子供たちは、まずパントマイムで芝居の面白さを覚える」のであり、「パン

トマイムはイギリスにおける青少年の演劇教育の一つとしてきわめて重要な役割を果たしているわけである」（升本匡彦）というのである。

この〈クリスマス・パントマイム〉の観劇などの海外体験と、幼少年時代からの環境、いわば芸能体験・教養とが相まって、倉橋の子どもの演劇鑑賞教育の考え方をつくったとみてよいだろう。

倉橋が欧米の視察旅行から帰って東京女高師教授として、附属幼稚園主事に復帰した時期は、大正デモクラシーの時代的潮流のなかで、芸術教育への関心が高まり、子どものための演劇などにも、かってないほどにさかんな動きがみられた。だが、倉橋は、子どものための演劇よりも、日本独特の小さな演劇形式といえる紙芝居(2)と、保母による人形劇に強い関心を示し、実践したのは興味深いことだ。

幼児には、俳優による演劇よりも、紙芝居や人形劇の方が鑑賞に適切だと考えたのにちがいない。その考えを、はっきりと主張したり論じたりしているわけではないが、幼児教育者としての感受性・バランス感覚が、そういう選択をさせたのだと思う。

倉橋が、自らも人形をつかって参加した「お茶の水人形座」の実践はどんなものであったかは、先にもあげた附属幼稚園の二人の保母、菊池ふじの、徳久孝子の共著になっている『幼児のための人形芝居脚本』に収められた一〇編の脚本とその解説、これに寄せた倉橋の序文を読めば、その大よそはわかる。

この脚本集は、第二次大戦後に、増補改訂版が、同じ菊池・徳久の共編となり、『人形芝居脚本集』(3)と少し書名も変えて、フレー

ベル館から刊行されている。これに、倉橋は旧版とは全くちがうあたらしい序文を書いているが、ここに、六か条ほどの人形劇上演についての留意点をのべている。「新版御披露の口上のついでに、お茶の水座伝統の芸風とでもいうところを、二三申述べてみよう」として箇条書きにしているのだが、これには、倉橋の幼児のための人形劇についての考え方、つまりは、倉橋の演劇鑑賞教育論が語られているとみてよいのではないかと思う。長くなるので、はじめの三か条だけを紹介しておこう。

「その一、幼稚園の人形芝居は、どこまでもマジメのものであること。決して余興でも遊芸でもない。昔流の保育項目ではないが、新保育要領でれっきとした保育内容の一つになっている。筋も演出も、戯れのじょうだん半分であってはならない。

その二、演出（冨田注、ここでいう「演出」とは人形操作、演技をさしている）は充分気を入れ、観せる前に一応の稽古もいること。その場の即興で、口から出まかせ、指の動き放題といった風のことは以てのほかである。型のきまった歌舞伎という訳ではないが、少くも一つの筋はいつも変わらぬ演出であって欲しい。

その三、わるふざけは禁もつのこと。喜劇もよしユーモアも大切だが、前うけ一方の茶番狂言は厳禁である。子供なりにいろいろの情緒をはたらかせるのが劇の特色なのに、げらげら笑いだけでは愚劇であろう。子供をも愚にする。」

以下、その四は「お談義は尚更禁もつのこと」、その五は「すべてあっさり運ぶこと」、その六は「一番大切なのは、演出者（これは「演技者」のこと）が先ず劇中の人物の心に

なりきらなくてはならぬこと」などをあげている。

倉橋が、子どもに人形劇を見せることをどういうものと考えていたかがうかがえる。それは、どこまでも幼児の情緒、想像力のやしないのために必要なものであり、まじめなものでなければならないと考えていたのである。

注（1）この文章は後に升本匡彦著『本と芝居〈イギリス再訪〉』（胡蝶豆本30、一九八五年一月、胡蝶の会刊）に収録される。

（2）『子供讃歌』の「一一、帰国」の章に、帰国後の彼（惣三）は、「駄菓子屋の調査と紙芝居の研究と、もう一つ、農繁期託児所の唱道とに凝った」と書いている。

（3）戦後に出たこの『人形芝居脚本集』の奥付には発行年月日が脱落していて不明。但し倉橋惣三の署名のある序文の終りに「昭和二五年七月」とあるので、その時期の刊行と推察できる。

（児童演劇評論家）

若いお母さんたちへ

はるにれの会

菊池慶子

「お母さん、『お母さん』って、つらい仕事？」

次女（小学三年）が私の顔をのぞき込んで心配そうにこう聞きます。母親の私が、たまにふっと疲れた表情をしてしまったりするといつもこうなのです。次女のこの言葉と眼差しに私はやっと我にかえり、笑顔をとり戻します。

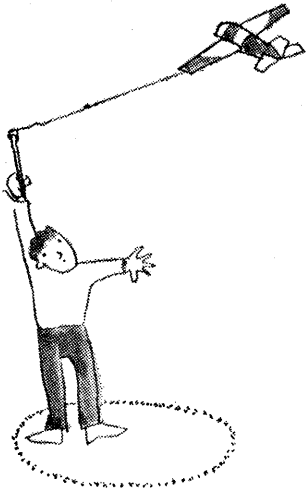
「とんでもない。最高に楽しい仕事だよ。だってみんながかわいいから」

と子どもたちを抱き寄せるのです。いつも明るい母親でありたいとは願っていても、こんなことを時々くり返しているというのが正直なところなのです。

ある高名な数学者が、その教育論の中で、「とにかく子どもにとっては、いつもハッピーな母親というのが最高の母親だ」と書いていましたが、その通りだろうと思

います。しかし、「面倒なことは考えなくていいのだ。とにかくハッピーでありさえすれば――」などと腹を決めてはみても、現実にその日その日を暮らしてみれば、むしろハッピーであることこそが難しいと感じられるのです。今の時代、子育ての日常というのは実に事が多いのです。でも、母親となって十年と少し（長女小学五年、次女、長男小学一年）、少しずつではありますが、やはり心の在り方は変って来たように思われます。ちょうど、何の自信もなく放り投げられた海で、もがいているうちにいつか呼吸をつかみ、余計な力を抜くことも覚え、やがていくらか泳げるようになっていく――というような感じで、「母親であること」も身についていくものかも知れません。私もまだまだ「これから」の母親に過ぎませんが、より若いお母さんたちのために、今思い起こせるところを綴ってみようと思います。

初めて母親になった頃というのは、誰にとっても戸惑



いの連続だろうと思います。私にとってそれはもう一昔前のこととなってしまったのですが、他のさまざまなことは記憶から消えてしまっても、初めての子どもを育てた頃の思いというのだけは、いつまでも心に残るもののようです。

今、特に強く思い起こされるのは、「自分は親というものになったのに、何と我が子のことで動揺しやすいのだろう」という、親としての自分のいかにも頼りない姿への困惑の思いです。かつて自分自身が子どもであった頃、「親」というのは、とてもゆるぎない存在のように見えていました。いつも自信にあふれ、迷いのない決断を即座に下すことができて。それにひきかえ、このなりたての「親」は何と不安定で頼りないことか——。泣きやまない赤ん坊と、一緒に泣きたい気持であやしながら、それでも、いつかは自分も「ちゃんとした」「オタオタしない」親になりたい、いやなれるのだ、という、漠然とした確信のようなものを抱いていたように思います。

しかし、道は決して平坦には出来てはおらず、一つ山を越せばまた——というように、子どもの成長とともに形を変えて諸々のことがやって来て、この「親」は相変らず自信なくオタオタし続けなければなりませんでした。

幼稚園に入ってみれば、どうも我が子はよその子に較べて「出遅れている」ように見えて気になり出しました。「一人一人子どもは違うのだから」と頭ではわかってはいても、その時は心が揺らいで仕方なかったのです。時に我が子をせき立ててみるような場面もありましたが、失敗と反省をくり返し、あれこれと思いめぐらすうちに、いつともなく、子どもを比較することの無意味さに心から気付くことができたように思います。本当にいつの間にか、そういうことでは動揺することはなくなっていました。

また、我が子が「よその子にいじめられた」と泣いて帰ったというような時にも、この「親」は、子どもと一緒になって、胸がしめつけられるほど悲しくなってしま

いました。子どものけんか、と一笑に付すことがどうしても出来ないのです。今なら、「それも大切な経験なのだから……」と心静かに見守ることも出来そうですが、その頃はとてもそこまでは到達していなかったということなのでしょう。周囲を見れば、自分と変らない年代の若い親たちが、自分よりはるかに落ち着いて、上手に子育てをしているように見えて仕方がなく、自信をなくしかけるということも度々でした。

こんなこともありました。長女が小学二年のころのことでした。遊びから帰ってきて、突然、「お母さん、ネコを飼いたい」と言いだしたのです。話を聞いてみると、こうなのでした——。

長女の友だちの家でネコを飼っていて、そこに何匹か子ネコが生まれたそうなのです。その家ではそんなにたくさん飼うわけにはいかないので、生まれた子ネコは捨ててしまわなければならないわけです。昨年も、一昨年も、生まれた子ネコたちは段ボール箱に入れられて川に流されていったし、今年もそうなるだろうというのです——。

友だちのそういう話を聞きながら、長女はすっかり子ネコがかわいそうになり、何としても自分が助けてやろうと心に決めて帰って来たらしいのでした。夕食の時もネコのことばかり言い続ける長女に、「ネコはかわいそうだけれど、家では今いる一匹の犬でもう十分なのだから」と、この時ばかりは私も断言したのです。私の様子に長女は黙ってしまいましたので、きっとあきらめてくれるだろうと私も軽く考えておりました。

ところが、長女は夜中に激しく泣き出したのです。行ってみると、「お母さん、子ネコがかわいそうだ。川に流されて、海まで行ってしまう。おぼれて、死んでしまう。いやだよ。いやだよう」その言葉に、長女がそこまで思っていたのかと改めて驚き、母親の私の心も揺れに揺れました。確かにその通りなのです。本当に子ネコはかわいそう。その子ネコを何とか助けたいという長女の気持も本物です。でも……。「また明日考えてみよう。何かいい方法があるかも知れない」そうは言いながら、

「かわいそう」「でも飼うことはできない」この二つの思いの間、私はただ、迷うばかりでした。

また私は、この長女には、いつかこんな問いをぶつけて来られたことがあったのを思いだしていました。

「お母さん、サンタクロースは、どうしてアフリカとかの本当に困っている子どもたちのところに行ってあげないの？　食べる物や着る物をいつも待っているのに」

そう言われて、どうにも答えようがなかったのでした。この時は、長女がまだ小さかったのをいいことに、うやむやにしてしまいましたから、今度こそは、親も考えるだけ考えなくてはなるまい、そうも思っていました。

翌朝、子どもたちを送りだした後、私は教会に行き、牧師さんのところを尋ねました。この教会は、子どもたちが入った幼稚園の付属しているところで、牧師さんはそこの園長先生でもあり、長女のこともよく知っておられる方でした。子ネコの件を、この牧師さんに相談してみようと思ったのです。

「ウーン。Mちゃんならそう考えるだろうなあ」

話を聞き終った牧師さんは、考えこんでしまいました。そして、ポツリポツリと、ご自分にもかってそういう経験があったということを話されました。

牧師さんの、今はもう成人された息子さんが小学生のころ、捨てネコを拾って来たことがあったのだそうです。かわいそうで仕方なくて二晩ほど家に泊めたのだそうですが、やはり飼うことはできないのだと何とか説得して、元の空地に一緒に戻しに行ったということでした。

「あの時は、子どもだけじゃなく、親の方もとても辛かったですよ。しかし、その辛い思いを子と親で共にしたということは、今にして思えば、大切なことでしたね。それに、Mちゃんは、この世にはかわいそうなネコたちはいっぱいいる。ネコだけじゃない。人間だって——。そんなことまでも思って、涙がとまらなかったのでしょう。こういうことにいい解決法なんてあり得ないです。親が子どもと一緒になってオタオタする。それしかない

です。それでいいんですよ」

牧師さんの言葉に、やはり来てよかったとつくづく思っていました。私がそれまで漠然と思い描きめざしていた「毅然たる親」ならこんなネコのことぐらいで心騒ぐことなどなかったでしょう。いくら子どもが泣こうとも平然と片付けることができたでしょう。しかし、私にはそれは出来ない。自分の心に正直に子どもと付き合っていきたい、あえて、「オタオタ」し続けよう、そんな覚悟のようなものが、この時心に出来たように思います。また、それまではただ忌わしいものでしかなかった、この「オタオタする」という言葉が初めて何か深い意味のありそうなこととして見え始めてきたのでした。

教会など行ったこともない私が牧師さんのところを尋ねて来たことを話すと、長女はとても驚いた様子でした。その後、ネコのことは親子で何度か話し合いましたが、いつのまにかあきらめる方に向いていき、忘れたわけではないけれどお互いに話題にしなくなりました。ただ、この頃からますます、長女は、草花や生き物に対して優しくなっていったように思われます。

そのうち、今度は「テレビ」のことで三人の子どもたちがそろって騒ぎ出しました。「夜九時からの番組を他の友だちは皆見ているのに、家だけ見せてくれない。だから皆と話が合わないし、ばかにされる」というのでした。我が家では遅くとも九時就寝と決めていて、他のことではかなり大様にしているつもりの私も、このことについてだけは譲らないので、子どもたちの申し出も初めはおそるおそるものでした。しかしそのうち向こうも勢いづいて来て、「うちは本当に時代遅れなんだから」とか言い出しました。早寝早起きの習慣はやめるわけにはいかないとは思いながらも、内心では「もっと自由にさせて、任せてみた方がいいのだろうか」とも思ったり迷いました。

しかしいつのまにか、その番組が終ってしまったのか、言いたいことを言ったので子どもたちの気が済んだのか、話に上ることはなくなっていました。

そうこうしているうちに、今度やって来たのはファミ

コンブームです。とにかく子どもたちには身体を動かす遊びを、と思っていましたし、いつの間にか三人とも大変な読書好きに育っていましたから、そのようなものは入りこむ余地なしと勝手に思いこみ、周囲で「買った」という話を聞いても何とも思わずにおりました。しかし、子どもたちにはそれなりの仲間うちでのつきあいというものがあります。「皆が持っているからほしい」やはり口々に言い出しました。一人一人の言い分を聞いていると、なるほど、そう思うのも無理ないだろうと思ってしまうものですから、やはりまたオタオタし始めました。

その時々の子どもの世界の流行——それとて、商業主義に生きる大人が仕掛けたものに過ぎないのでしょうが、それでもやはり、全く無意味なものとして無視し切ることもできないのです。子どもの身になってみれば、何とか一緒に考えてみてやりたい、そう思っていた矢先、学級懇談会がありました。それで私は、このファミコンのことを話題に出してみたのです。

「買うつもりは毛頭ないのですが、子どもの気持になってみると、全く無下にもできないような気持になって……」

私の話し方は、心境そのままに、極めて歯切れの悪いものでした。すると一人のお母さんが、

「やはり親のしっかりした価値観が大切だと思います。家では、そういうものにはお金は使わないと決めて守っています。子どもたちも納得し、旅行とか、意義あることにお金は使っています」

と、何の迷いもない様子で話をされました。

確かに正論です。私とて、この正論は考えにあるのです。この正論でどこまでも子どもたちを押し切り口を封じてしまうことは、あるいはた易いことかも知れません。でも、私が他の親たちと話してみたかったのは、正論はわかっているし、それを変えるつもりはない、しかし、生身の子どもたちを前にしてのこの「心の揺れ」、これをどうしようという、何とも把えどころのない、この部分だったのですが。でも、やはり皆の前に出すには余りにも把えどころのなさ過ぎることのように思えたの

で、私はただ黙って聞いていました。

会が終り、帰途をたどりながら、私は、正体はまだよくつかめないものの、親としての何か新しい心の在り様が開けてくるような気分になっていました。何日かして、ふっと、それは

「オタオタするけれどオタオタしない」

という境地かも知れないと思うようになりました。

「オタオタする」というのは心の揺れであり、やわらかく揺れる子どもの心と、親が、その揺れを共にすることなのではないでしょうか。だから、「オタオタする」ことは、親としてとても自然なことであり、すばらしいことなのではないか——そう思うことで、「オタオタするけれども、その『オタオタすること』に対しては、オタオタしない」という境地が開けてくるのではないか、と思うに至ったのです。

そしてまた、振り返ればいつも毅然とした姿でばかり見えてくる自分自身の親たちも、内面では本当に揺れていたのではなかっただろうか——いや、きっとそうだったに違いないと思うのです。今、この私も親として、子どもたちには恐らく同様に自信ある存在として映っているのでしょう。大人であるというだけで、子どもにはそう見えるものですから。

しかし、親子の間がいつも正論で割り切れて迷いのない状態であるというのは、あり得ないし、あったとしたら、むしろ危険な状態だろうと思います。

いつも混沌としているからこそ子どもなのだし、いつもオタオタしているからこそ親なのではないか——今は心からそう思うのです。かつて母親になりたてのころの気持を思い返すと不思議なくらいですが、子どもたちとの日々の暮らしが、いつのまにか発想を変えさせてくれたもののようです。

これからも、思いめぐらすことを大切に、オタオタし続けてみたいものです。

あけまして
おめでとうございます。

旧年中は、多くの筆者の方々に、とてもお世話になりました。本当にありがとうございました。今後共、どうぞよろしくお願い申し上げます。

お正月というのは、どうして、どこの局も、同じテレビ番組を制作するのでしょうか。出演しているタレントも同じでどの局をまわしても、同じ顔が、出てきて、同じようにゲームをしたり、歌を唱ったり、本当に、みんな同じなのです。

そんな番組を目にする毎に、制作の局は、手を抜いているとしか思えません。私は、一年の内で、お正月のテレビほど嫌いなものはありません。もしお正月の三日間、テレビの前に座わっていたら、きっと頭が、正月ぼけというか、テレビぼけになってしまうことでしょう。

お正月は、街が、他の日より静かになります。お店の大半が閉まっているせいもあり、また、車も数もぐっと減って、空気が、変わるのがわかります。

街の中を歩くだけでも、それぞれの家の前に飾られた松飾りで、正月気分を充分味わえると思うのです。ゆっくりと、日本古来の文化を近くで味わえる日なんて、お正月ぐらいのものではないでしょうか。低俗なテレビの前に座わっているより、よっぽど頭のためにいい気がします。

またいっそのこと、テレビもお正月は、お休みにしたら、さぞテレビ局の人も楽だろうと思うのです。十月、十一月に、死にそうな忙しい思いをしなくてもいい。もっと、ゆとりを持った良質の番組ができるのにと、思ってしまいます。

お正月は、低俗テレビから離れてすごすことを提案します。頭のために……。

幼児の教育　第八十六巻 第一号
一月号 ©　定価 四〇〇円
昭和六十一年十二月二十五日　印刷
昭和六十二年 一 月 一 日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本 田 和 子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日 本 幼 稚 園 協 会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図 書 印 刷 株 式 会 社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九—一九六四〇番
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

＊万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

新刊

保育をとりまく数々の疑問、悩みにお答えします。

よりよい保育の条件

■日本保育学会編

■B5判 244頁 定価1,800円

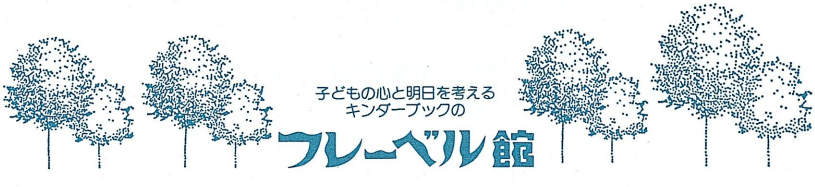
内 容

●よりよい保育をするためには、1クラスの幼児数を少なくするだけでこと足りるのか。

●本書では、次の3点

1. 子ども観・保育観、幼児理解の深さ、子どもの実態と保育計画のずれなど多分に保育者の資質に関するもの。
2. 保育者のチームワーク、園舎・園庭、地域性など、組織と保育空間の問題。
3. 保育制度など行政の問題。

こういったあらゆる視点から、よりよい保育の条件とはなにかを考えていきます。

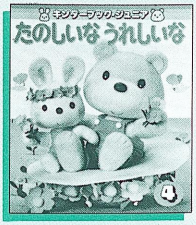


子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

保育絵本9誌の新しい企画、夢が大きくひろがります。

はじめての生活絵本
キンダーブック ジュニア

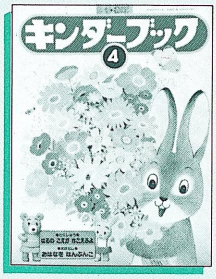
創刊



●年少児を対象とした総合生活絵本。
●新しい心の芽ばえを育てる豊かな題材をお届けします。

★L判／22頁／付録母親向け解説書（こぐま通信）／4月号特別付録「たのしいシール」「こいのぼり」／250円

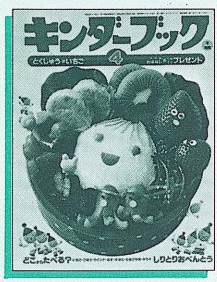
ゆたかな情操と創造する心を大切にする
キンダーブック①〈情操〉



●年中児を対象とした生活絵本。
●季節感、生活感を盛りこんだ「おはなし」「特集」などを、楽しく展開していきます。

★A4ワイド判／36頁／特別付録「ワイド版カラー工作」「おともだちシール」「こいのぼり」／280円

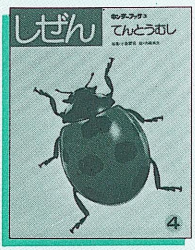
観察する目と 考える心をそだてる
キンダーブック②〈観察〉



●年長児を対象とした生活絵本。
●子どもの生活観察する目を通して、心の成長をそだてるお手伝いをします。

★A4ワイド判／40頁／特別付録「めいろブック」「ワイド版カラー工作」「シール」「こいのぼり」／280円

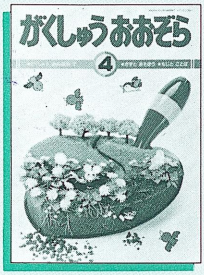
自然の不思議を 感動的に伝える
しぜん ―― キンダーブック③



●子どもの興味と関心の芽ばえに、身近な動物を通してやさしく語りかける科学絵本。
●美しいスーパーリアリズムの世界！

★L判／32頁／上製本／特別付録「こいのぼり」／330円

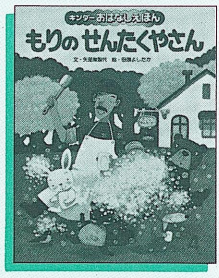
幼児の学習意欲を 生みだす
がくしゅうおおぞら



●5歳児を対象とした総合学習絵本。
●子どもの生活から身近な題材で遊びながら、知る・覚える楽しさを学びます。

★A4変形判／36頁／別冊付録「おかあさんの ほん」／特別付録「あいうえおひょう」「こいのぼり」／300円

夢と感動する心を そだてる
キンダーおはなしえほん



●子どもたちの夢と感動する心を大切にはぐくむおはなし絵本です。

★L判／32頁／上製本／特別付録「こいのぼり」／330円

絵本を開く楽しさをあたえる
キンダーメルヘン

●子どもたちの豊かな創造力をグングン伸ばします。

★L判／28頁／特別付録「こいのぼり」／250円

園生活で
はじめて出会う絵本
ころころえほん

●先生やお母さんとともに、あたたかいスキンシップのお手伝いをします。
●リズミカルで、単純明快なおはなしを繰り広げます。

★AB判／20頁／特別付録「こいのぼり」／250円

保育専科

●教育要領改訂の方向によって、幼児教育の内容を明らかにしていきます。

定価400円
別冊付録つき

'87フレーベル館 月刊絵本ラインアップ

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支店・支社・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館